2017年10月　ヘルパー研修報告

日時　；2017年10月12日(木)　9：30-11：30
場所　；北山ふれあいセンター研修室
参加者；ヘルパー29名、職員10名　　進行　橋本　　記録　柏原

今回は「当事者の話し」というテーマのもと、ＪＣＩＬ（非営利活動法人自立生活支援センター）の方々に来所いただき、活動内容や実際に体験した事を寸劇し、ご講義頂きました。

＊ＪＣＩＬ事業内容他（JCIL代表 小泉氏より）
どんなに色んな障害があっても、皆さんと同じ人間であるということから私達の活動がはじまりました。街中の１つ１つのバリアフリー化をすすめる運動をしています。

・２４時間介護の実現に向けての交渉
→今も活動しているが2000年代に認められるようになり、今まで自立した生活ができなかった人が出来るようになった。

・障害者の差別解消に向けた制度を広めるため、街頭にたって活動

・介護報酬の引き上げの運動
→全国的な活動で、たくさんの団体が財務省に報酬引き上げを訴えた。

・入院時の介護保障運動
→今まで介護を受けていた人も入院中は公的な介護を受けられなかったが、認められるようになった。

・地下鉄のホーム柵を作る活動
→実際にホームから転落するケースがあり、現在は京都駅や四条駅にホーム柵が設置された。将来的には全ての駅に柵を設置される予定。

・寸劇

→実際に体験した差別事例を分かりやすく伝えたいと思いで、３年ぐらい活動を続けている。京都市交通局と合同で、交通局の研修を一緒に考え、研修をおこなっている。

・バリアフリーチェック

→公園等や繁華街でのバリアフリーチェックをおこなっている。

・キャンプ活動

→車イスの仲間という会で障害の有無にかかわらず企画し、共に生きる社会というのを、キャンプを通して実践していく。これを基に、自立したいと希望する人がでてきたりしており、大事にしている活動のひとつ。

・福祉祭り

→自分たちで企画し、シンポジウムを毎年おこなっている。
今年は相模原事件について開催すると、全国から 200 名ほど参加者あり、やまゆり園の元職員から話を聞いたり献花をおこなった。

一見、自分たちのための活動かと思われるが、障害者が声をあげることで、色んな人たちが住みやすい街となると考えています。

寸劇鑑賞

寸劇を 3 本鑑賞しました。
実際に体験された内容が劇の題材となっています。

①『バスでもっと出かけたい』

実際に、バスの乗車拒否に合われた下林さんの体験を劇にしています。

下林氏：今日は気になる人と初めての食事やし、遅れられへんから、約束の 1 時間前に着けるように早めにバス乗ろう。ノンステップバスまだかなあ～。それにしてもドキドキするなあ…。あ！ノンステップバスがきた！！

バス運転士Ａ：（チラッと見て通過）

下林氏：え～。僕のこと見えてなかったんかなあ？　今、目合ったよな？？なんで乗せてくれないの！？　こんなにも目立つ車イスの色しているのに！！まあ、しょうがない。次のバスでも間に合うから次ので行こう。

バス運転士Ｂ：一人？付き添いの人いないの？

下林氏：はい、そうなんですよ。だから、ちょっと手伝ってください。

お願いします。

バス運転士Ｂ：わし、腰がいたいんや！次のやつにして。(バスは行ってしまう…)

下林氏：そんなぁ～。このバスに乗らないと約束の時間に間に合わないのに。
とりあえず、遅れるって電話しとこかな！！
あ…もしもし、ごめん。うまいことバスに乗れなくて 30 分ぐらい
遅れそうで…。急いでいくから待っててね。

バス運転士Ｃ：バス乗られます？今、乗車口
合わせますね。車イスの方が
乗られるので席を移って貰っても
いいですか？スロープ出すので
待ってくださいね。

他の乗客：まだかなぁ。なんでこんな時間に
乗るかなぁ。早くしてくれへん
かなぁ。地下鉄に乗ったらええ
やん…。

下林氏：このバス乗らないと間に合わないのに、なんでこんな嫌な気持ちで外出
せなあかんのやろ。

②『たっちゃんのひとりぐらし』

たっちゃんは 20 歳後半。脳性麻痺で車いす。知的障害もあって計算とか漢字のある文章は苦手。平日はデイに行っているけど、電車が好きなので週に１回はガイドヘルパーとお出かけして、電車に乗ったり、いろんなところに遊びに行ったりしています。おうちで介助は、主にお母さんがやってくれている。でもお母さんも年をとって、ちょっと介助がしんどくなってきたみたい。ある日、もともと腰を痛めていたお母さんは、ついにぎっくり腰になり、たっちゃんを抱える介護ができなくなってしいました。とりあえず、どうしたらいいかと思い、お母さんは役所に行きました。

母：あいたたたた…すみません。ちょっと相談があって。

ケースワーカー（以下、CW）：はい、どうされました。

母：あの息子のことなんですが…私腰を痛めて、介護が難しくなって。これから
どうしたらいいかと思いまして…お父さんは少し仕事の都合つけて手伝って
くれると思うのだけど、なかなかそれもずっとというわけには。

CW：そうなんですね。とりあえず緊急対応のショートステイの支給決定出せると
思います。週１日・２日なら受け入れ先あると思いますがどうでしょう。

母：そうですね。それができるなら、とりあえずはそれでお願いしたいです。
私もがんばれたらいいけど、もう年ですし。

CW：介護もかなり必要で知的障害もお有りなら、この先、施設も考えないといけ

ないかもしれないですね。今のうち徐々に慣れていってはどうでしょう。
母：そうですね。

こうしてお母さんは、おうちに帰ってからお父さんとも相談し、たっちゃんにショートステイに行ってもらうことにしました。家族は、『いつまでも介護はできないから、さみしいけど仕方ない…。親切な人にみてもらえたらな…。』とそんな思いでした。

一方たっちゃんは…。
あるとき、いつもガイドヘルプでお世話になっている事業所の小泉さんと会いました。

小泉氏（JCIL）：お母さん腰を痛めて大変なんだってね。これからどうするの？
たっちゃん：ショートに行きます！！
小泉氏：そうなんだ。でもたっちゃん、一人暮らししたいて言っていたよね？一人暮らししたいんだよね？
たっちゃん：はい！！
小泉氏：だったらショートステイじゃなくて一人暮らしの練習したらいいじゃん。
たっちゃん：はい！！
小泉氏：なんか不安ある？
たっちゃん：ヘルパーは大丈夫ですか？
小泉氏：ヘルパーはまかせといて。ちょっとお母さんともお話しさせて貰っていい？
たっちゃん：はい！！
小泉氏：このたびは大変なことですね。
母：すみません。こんなことになって。
小泉氏：これでショートを使うって聞いたけど…。実は以前から、たっちゃんから一人暮らしをしたいと伺っていました。今回のことはチャンスなのかもしれないとおもうのですが…。
母：そんなこと言っているんですか？もしできるんならやらせてあげたいですけど…。わたしどうしたらいいか本当にわからなくて…。
小泉氏：そうですよね。不安ですよね。でも、たっちゃんは以前から、お母さんの負担が大きいことも分かっていて、何とかしたい。って。だから頑張ると思いますよ。
母：そうですね…。私もこの子のこといつまでも見ていけるわけでもないし…。施設だとやっぱりうちの子、あんまりしゃべらなくなるし、元気がなくなってしまうから。一人暮らしできるならぜひしてほしい…。
小泉氏：とりあえず体験してみましょうよ！お泊まりの練習とか、買い物や料理の

練習とか。たっちゃんやってみる？
たっちゃん：はい！

お母さんは半信半疑です。でも、たっちゃんは確かに一人暮らしをしたい様子。
施設に入ったら、この子のやりたいことができなくなる。外出もできなくなる。
もし一人暮らしできるならしてほしい。そんな思いでお母さんは、たっちゃんと
一緒に事業所を借りて、アパートの一室「体験室」という場所を見学に行きました。
お父さん、お母さんともいろいろ相談しながら、とりあえず週１回、ショートに行く
予定のところを体験室の宿泊にあてました。買い物や料理の練習もしました。週１回
ができたので、それを２回、３回と増やしていきました。
一人暮らしをしている障害者のところも訪ねていきました。ヘルパーさんにもたっち
ゃんの身体で注意してほしいことをいろいろ伝えました。
一人暮らしをはじめたたっちゃんは、どんな事を思っているでしょう？
ある日小泉氏は一人暮らしをはじめたたっちゃんの様子を見に行きました。

小泉氏：たっちゃん楽しい？
たっちゃん：たのしい！！
小泉氏：どんなところが？
たっちゃん：料理
小泉氏：これからどんなことをしたい？
たっちゃん：友達呼んで、パーティーを開きたい！！

たっちゃんはこれからも地域の自分の家で暮らし続けます。たくさんの人に支えられ
ながら。重度の障害があっても、こんなふうに地域で一人暮らしをする人が増えてい
きます。当たり前のようにどんな障害があっても、適切な支援を受けて、地域で自立
して暮らしていける社会になるのを願っています。

③『ここに居たい！－施設はいやだ－』

僕は４０歳、お母さんと二人で頑張っていた。僕大切なものいっぱいある。
僕、お話し大好き。計算が苦手。いらないもの捨てるの苦手。一度始めたこと途中で
止めるの苦手。
お母さんが倒れた！救急者で病院に行ってしまった。ぼく一人。この家に一人。
料理も洗濯も自分でできるよ。少し苦手なことも手伝ってくれたら出来る。
ぼく、この家でお母さんを待ちたい。今日、お嫁にいったお姉さんと役所の人が
家にくる。

姉：まあ汚いなあ、ほんとに。片付けなさいと言ってるでしょ。

ケースワーカー（以下、ＣＷ）：結構な状況ですね！！

姉：お姉ちゃんもそんなしょっちゅう来れないの！！やっぱりここで一人で暮らすのは無理無理！！ケースワーカーさんお願いします。

CW：そうですね、この状況では一人暮らしはちょっと厳しいですね。
今だったら受け入れてくれる施設見つかると思うので、そっちで手続きすすめましょうか？

姉：よろしくお願いいたします。ちょっと一人じゃ無理だから。

僕：いやだよ。ぼくはここで暮らす。ここに居たいんだ！お母さんの帰り待ってるんだよ。

姉：無理だから！！何言っているの！！

CW：施設だとちょっと見学に行ってみるとか、どうですかね？

姉：私も長くはいられないので、それでお願いします。

CW：まずは１週間ショートステイで行ってみるとか、どうですか？

姉：じゃあそれでお願いします。

ぼくはショートステイに行くつもりだった。少しの間だけ施設で過ごすんだと思っていた。１週間たったら迎えにきてくれると思っていたのに、もう帰れるお家はない。お母さんと暮らしていたあの家はもうない。あきらめるしかない。
本当はヘルパーさん、支援してくれる人、しっかり考えてくれたら、ぼくは、あのお家でくらせたはずだった…。ぼくは、あのお家で暮らしたかった。

研修の報告

以下、参加された方からいただいた報告です

・バスで周りに迷惑を掛けていると文句を言われたことを思い出しました。
もっと一人一人の意識が変わること望みます。
・外出したくなくなる理由のひとつが理解できました。
・一人暮らしをされている方がいらっしゃるという事で驚きました。
・障害者も一人暮らしが普通にできる社会になってほしいと思いました。
・住み慣れた地域社会で暮らしていける社会になってほしいです。
・自分の生まれた家にずっと住んでいたいと思うのは一緒なのに、なかなか出来ない難しい問題だと思いました。
・色んな制度や支援を利用して、自宅で生活できえばと思いました。

～JCIL 小泉氏より～

みなさんいかがでしたか？最初の「バスに乗りたい」では、日頃の私たちが利用している公共交通機関の例です。あれは実際に下林氏が体験した話です。
私たちはみなさんのようにバイクに乗れたり、自転車にのれたり、車を運転したりできる人はごくわずかです。だからこそ、公共交通機関はとても大切です。
それでも普通に乗車させてもらえないことがあります。
乗れても、周りの乗客から嫌な目で見られたり、いやな言葉を浴びせられることもあります。私たちも同じ街で暮らしていることをわかってほしいです。
みなさんはヘルパーという仕事をされています。
ヘルパーとして、障害のある私たちの生活を支えてくださっています。その仕事の中で、私たち障害者の置かれている現状を、目の当たりにすることもあるでしょう。だから分かってくださっていることもあると思います。だけど、今一度考えてほしいのです。私たちのことを…。

みなさんは、昨年 7 月に相模原で起こりました、障害者殺傷事件のことをどのように受け止めていますか？自分のことと関係無いことのように思っていますか？
「障害者はいなくなればいい」という名目で、19 人の障害者が殺害され、そして、その 19 人の名前も匿名にされました。
痛ましい事件ですが、私たち仲間の間では、比較的冷静に、事件を受け止めた人もいます。

これまで私たち障害者が、社会からどのように扱われてきたか、そのことを思うと、事件が起きたことにあまり驚きはありませんでした。
私たち障害者はいない方がいい。そういうメッセージは、この社会の至る所に渦巻いています。それはきっと無意識の中で行われているのだろうと思います。
みなさんは、ヘルパーという仕事の中で、私たちが普通、行きたいと思ったお店に行けなかったり、また劇の中の「バス」利用の際の場面に出くわすこともあると思います。
バスに乗れなくても、後回しにされても、ジロジロ見られても行きたいお店に行けなくても、それは「私たちに障害があるから」仕方ないのでしょうか？
また、親が介護出来ない状況になったとき、私たちは慌てて相談にしに行きます。
助けを求めに行きます。支援センターや福祉事務所、そして皆さんにも。
②と③の寸劇も、実際にあった話です。
たっちゃんは今、一人暮らしをしています。③の方は今も施設に入っています。
まわりの人の対応次第で、施設に入るか、一人暮らしするか変わります。
当事者が「お母さんが僕の介助できなくなったから、一人暮らしを考えています。」

などと伝えても、びっくりされ、あきれられることさえあります。こんなに重度なのに無理ですよと。私たちは、みなさんからよく聞く、言葉があります。
「安全が一番です」「安全ですからね」「何かあった時のために」「使える制度がこれしかなくてね」
その言葉を私たちに話しているみなさんは、その言葉の先に何がありますか？
私たちの「自由は」「未来は」「希望は」見えるのでしょうか？
私は、みなさんのその言葉の先に見えるものは「自由」を奪われる生活しか見えず、みなさんから「差別」を受けているのだと感じます。
安心したいのはいったい誰なのですか。
このみなさんの無意識な思想は、心優しさなのだと思っているであろう考えは、「相模原事件」の犯人の思想に繋がっていることに気づいてください。
私たちは、「地域で暮らす」ことにこだわっているわけではありません。ただ、みなさんと同じ暮らしがしたいだけなのです。
次に地域で自立生活を始めている知的障害者のある仲間や、いろいろな困難な状況を経て地域生活されている人たちを紹介します。

事例１．上田さん

親に年金を使われるのが嫌で、自分で一人暮らしを決めて、今はとても生活をエンジョイしている。
上田さんはピープルファースト京都（知的障害者の当事者団体）の代表者です。
ＪＣＩＬやピープルファーストの支援者に相談し、一人暮らしをしていこうと決めました。ＪＣＩＬの身体障害者の家も見学にいき、そこで自信をつけたそうです。
親とも話し合い、通帳を返してもらい、一人暮らしを始めました。毎日ヘルパーに入ってもらい、あとは自由にのびのび暮らしています。お金が貯まったらハワイに行きたいと思っておられます。

事例２．中村さん

さみしくてパニックを起こすこともあるけれど、一人暮らしを頑張っています。
グループホームで生活していましたが、グループホームが合わず、一人暮らしをされています。ＪＣＩＬと一緒に行政に 24 時間介護を認めさせました。親と離れて暮らすことは不安でさみしいことが多いです。さみしいときは介助者にきつくあたることもあります。
嫌やと言いながら、ピープルファーストのメンバーと旅行も行っています。
ときどきお家に友達を招いてパーティーも開いています。お母さんともほどよい関係で暮らしています。

事例３．永野さん

永野さんは三人兄弟で、上のお兄さんも脳性麻痺があり施設に入っています。
永野さんにも行政はすぐにショートステイ、施設入所を勧めました。
ＪＣＩＬは「ＩＬクラブ」という「放課後の余暇活動の場」を、制度を使わずに行ってきました。そのような場に小さいときから関わりがある中で、地域生活を続けようと提案しました。今は地元で朝夕ヘルパーに入ってもらい、一人暮らしをしています。

最後に今のことに触れておきます。
みなさんは、日ごろ、ヘルパーの仕事の中で、いろいろ戸惑われていることがたくさんあると思います。その戸惑いの多くは、「利用者」と呼ばれる、目の前の障害者の気持ちや、言いたいことが分からない。ということなのではないでしょうか？
特に意志を伝えることができない、言葉に表せない人たちのこと。どうしたらいいのだろうか？これでいいのか？とヘルパーに入るたびに考えますよね。そして分からないことがあれば、親御さんに聞く、当事者の人に聞く、責任者に聞く。だけどそれでも分からない。不安だ！そんな感じでしょうか？私たちはみなさんに一番伝えたいことがあります。目の前の障害者の思いや、考えが分からなくても、その人はあなたと同じ「人」であるのだと分かってほしい。障害があることで行動がおかしかったり、変だったりすることがあります。分からないことがたくさんあります。だから自分たちとは「違う」別の人と考えられてしまうのです。だけど、まずは「同じ」なのだとう視点から考えてほしいのです。あなたと私は同じ「人」です。そして想像してみてください。
目の前の障害者の状況や障害の内容、環境、そして起こっていること、全てがあなた自身だったら、どうしてほしいのか？どう考えるのかを。あなた自身がその状況だったらどのように接してほしいのか？想像して、そして深く考えてみてください。
そうすれば、今のあなたの「不安」を取り除く「ヒント」があるかもしれません。
難しく色々大変だと思います。だけど私たちどんなに重度でも障害があっても、みなさんと同じであること、忘れないでください。